

「分子イメージング科学研究センター アドバイザリー・カウンスル」

(平成 20 年 12 月 16 日～12 月 17 日実施／委員会形式)

(諮問事項)

- 1) 科学的に大きな意義のある業績あるいは社会的に波及効果の大きな業績をあげているか？
- 2) センター (CMIS) と海外の類似研究機関との比較およびそれに基づく改善点の提案
- 3) センター (CMIS) の理研内外における連携活動の評価および国際連携推進に関する評価
- 4) 将来の CMIS の研究スタッフ採用に関する提案

(報告書の概要)

アドバイザリー・カウンスルからは、以下に示す報告および提言があった。

- ・ CMIS は平成 20 年 10 月のセンター化から時間が経過していないため、今回は科学上の業績を評価することは適切ではないと判断した。
- ・ 公的・内部的の双方に使える「CMIS ビジョン」と、時系列に任務を遂行するためのマイルストーンを記した「ロードマップ」を作成する必要がある。
- ・ 化学分野や独自の in vivo モデルを利用できる、優れた前臨床施設を伴った研究施設に大きな強みと可能性があるが、焦点を絞る必要がある。高いレベルの科学的成果の達成のために、限りのある資源 (人材・時間) を集中する必要がある。
- ・ 国の委託事業 (「分子イメージング研究プログラム」) においては、理研は創薬候補物質探索拠点として位置づけられているが、「薬剤開発」という表現を緩和し、代わりに、将来的に薬剤開発への影響を与えることができる分子イメージング技術の研究と開発を目的とした方が良い。
- ・ 企画している多数のミッションを実現するための資源 (資金・人材) が不足している。
(認知度を得るため、選択的に重点化することが必要)

(提言への対応策)

- ・ AC からの提言に沿って、大まかな「ロードマップ」を作成した。今後、詳細な「ロードマップ」及び「CMIS ビジョン」について、若手の研究者も参画させながら作成していく。
- ・ CMIS は、日本における分子イメージング研究の拠点として、創薬プロセスの革新だけでなく、ライフサイエンスにおける新しい分野にも取り組む必要があることから、研究対象が広範に渡ることは必然である。今後は、AC からの提言趣旨を十分に踏まえて、優先順位付けを行い、適正な研究計画と最適な人材配置に基づいた効率的な研究を推進していく。
- ・ CMIS では、「薬剤開発」ではなく、「薬物動態の直接的追跡法の確立」と「薬効評価の客観的指標の確立」を目標として、分子イメージング技術を活用した創薬プロセスの革新を目指している。平成 22 年度から始まる次期委託事業においては、分子イメージングを実証型

医療技術・創薬科学技術・健康科学技術として定着させるための研究として取り組んでいく。

- ・資金については、国からの運営費交付金の増額に向け努力していくとともに、外部資金の確保及び共同研究の更なる展開などを積極的に推進していく。また、人材については、優先順位付けされたテーマを勘案し、テーマを推進するに相応しい人材を公募して優秀な人材を積極的かつフレキシブルに確保していく。

(委員リスト)

委員長	Prof. Bengt Långström	(Director, Uppsala University PET Centre/ Prof, Department of Biochemistry and Organic Chemistry, Uppsala University)
	Dr. Joanna Fowler	(Director, Center for Translational Neuroimaging, Brookhaven National Laboratory)
	Dr. Mats Bergström	(Director/Head of Biology, Lead Imaging Scientist For Oncology, GSK Clinical Imaging Centre)
	佐治 英郎	(京都大学大学院薬学研究科医療薬科学専攻 教授)
	定藤 規弘	(自然科学研究機構生理学研究所大脳皮質機能研究系 心理生理学研究部門 教授)
	田中 紘一	(先端医療センター センター長)
	湯元 昇	(産業技術総合研究所 理事)